

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第167号（2020年4月）



白井啓治

（六）春は陽だまりに怠惰する季節

『春の陽だまりに猫の鼻ちようちん』

まさか猫が鼻ちようちんをふくらませる筈はないのだが、春の陽だまりに終日隙だらけにだらしく寝ころんでいる我が家のもう一人の女主人、猫の耳ちゃんを見ていると、どうしてもそう思いたくなる。よくもこれほど無防備に、春の暖に怠惰出来るものかと感心する。

この女主人「耳ちゃん」とは如何にも変わった名であるが、ミミちゃんではなく耳の耳ちゃんなのである。この美女の猫が、放し飼いの犬に追い立てられ、吾家の玄関先に迷い込んで来てか細くミユーと声をかけて来た時、痩せた真つ白な体と耳が薄っすら桜色だった事に感動したのであった。それで同居人となることを許した時、迷わず即断に「耳」と名付いたのである。以来、逢う人ごとに、ミミちゃんではなく耳ちゃんですと説明してきた。

私は元来猫好きではない。だが嫌いというわけでもない。動物たちと暮らすのは大好きである。犬

猫を強いてどちらかと問われれば、犬の方が良いかな、という程度である。

耳ちゃんが同居するようになる一か月前のこと、孫娘の「葉津」と称して可愛がっていたバグ犬が悪性の喉頭癌で亡くなったのであった。その葉津に入れ替わるように耳ちゃんが同居を始めたのである。ところが耳ちゃん、一週間もたたないうちに、亡くなった葉津と全く同じ生活習慣を身につけてしまったのである。



人を除く動物というのは、一緒に住んでいると、時間的生活習慣に非常に厳密で、それを守ってさえやれば、人と暮らすよりも気楽に過ごす事が出

来るものである。生活習慣と言っても、朝目覚める時間、食事の時間、散歩とブラッシングをする時間、それに吾家に同居する犬猫だけなのであるが、私の夜布団を敷く時間である。

バグの葉津ちゃんもそうであったが、猫の耳ちゃんもどう言うわけか私の布団を敷くのは「時」と決めているのである。每晚必ず布団を敷く時間だよと教えに来るのである。原稿を書いている都合で、ちよつと待って、等と言おうものなら直に大声で吠えたり、猫パンチを喰らわす。それ以外は、自分勝手に好きな所で好きなようにしている。特にこの春の季節は、一番陽当たりの良い縁側に無防備な格好で、怠惰に終日寝ているのである。

（2009年4月9日）

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

《ふるさとの風は吹いて…》

二〇一七年 四月五日

・ 風に押されて移ろう季節に愉快する

季節というのは風に押されながら移ろっていくものと思っていたが、今年の春はどうなってしまったのだろう。風に押される前に、いきなり初夏の陽気になってしまった。風に押されて移ろい来る季節には愉快を思うのだが、風に押されなくて夏が春を押しつけてやって来るのでは不愉快極まりない。

寒さの厳しかった冬がカット・アウトして、春を飛

び越して初夏がカット・インして来たものだから、梅をはじめとする春の花々が一斉に咲いてしまった。梅の花、辛夷、木蓮、桜、水仙等々が次々とではなく一斉に咲き出したのである。風情もへったくれもない。何とも不愉快な春になってしまった。

そんな春の所為ではないだろうが、国の政（まつりごと）の場では、付度・文書改竄の話で右往左往している。何とも低レベルの話で右往左往しているのかと、不愉快さも頂点を越して唯々笑っちゃいます。

歴史書は、強者の都合で書かれるもの、とはよく言われることであるが、それにしても低い次元の話である。歴史とは、事実の記録であるが、改竄、捏造の記録も歴史として確りと後世に残しておかねばならないだろう。

一つの組織を経営していくためには、そのリーダーには権力を与えることが必要であるが、その権力とは平等という絶対条件のもとに与えられるものである。平等という絶対条件の元であれば如何な独裁であつても将来を見誤ることはないだろう。ところが人間という動物は、ひとたび権力を手にすると、平等という絶対条件を忘れてしまうようである。揚げ句の果て事実を隠蔽する悪しき付度でも付度なんだから有り難く受け入れよう、ということになるようである。

二〇一七年 四月十八日

・春の陽だまりに蜥蜴びよんと跳ねる

次々ページをめくるように季節が移ろい過ぎて行くのが日本の愉快なところだと思っていたのに、この

春は頁を捲った途端、見開きの中に全部の花の散りゆくさまが乱雑に描かれていた。春の長閑な愉快さはなかった。日々の移ろいを知らせてくれる花々の隙間を縫うように、花冷えの風が流れる愉快の見えない季節の中に放り込まれると、人生の終焉を無理矢理愉しめと押し付けられた気がする。そんなに押し付けてくれなくても、マイペースに日の移ろいを愉しむから、と声にしてみるもこの春の愉しみ方なのかかもしれない。そんな小生に同調してくれたのか、庭の蜥蜴の一匹が、何かのきっかけで覚えたのか、体をまげてびよんと飛び跳ね、楽しげに遊んでいるのを目にして思わず拍手を送る。

（以上は昨年6月末になくなられた本会の主査で脚本家の白井啓治氏の3年前の記事である。それから本会に主査はいない。会員それぞれが氏の遺志を受継ぎ本会の運営を継続している。）

### 地域に眠る埋もれた歴史(59) 木村 進

#### 【八郷地区】(2)

八郷とは7つの村と1つの町が昭和30年合併して「八郷町」となり、平成の大合併(2005年)で石岡市と合併し「八郷町」の地名は消えた。しかし長らく愛された「八郷」の名前はあちこちで使われています。

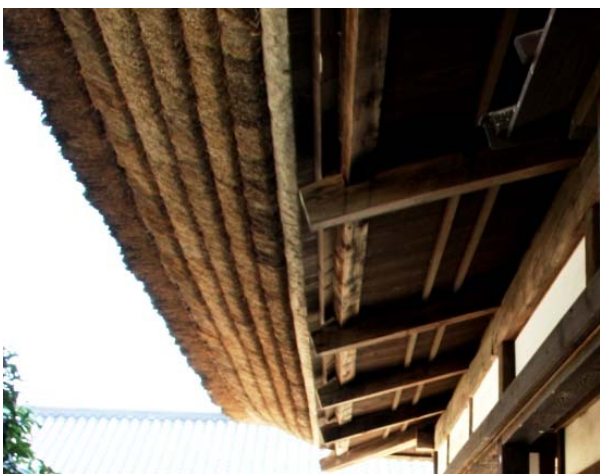
ここは筑波山く加波山く吾国山(わがくにさん)く難台山(なんだいさん)く鐘転山(かねころがしやま)の山並みにより西から北側を囲まれ、東側は霞ヶ浦に続く平野部に続く温暖な気候の地域です。

東京からも70 kmほどしか離れていないのに驚くほど豊かな自然とホテルも舞う里山が広がっています。以前NHKテレビで紹介されたテーマは3つでした。

1) 親子3代にわたり八郷地区で農業をしている家庭。昔はタバコ栽培をしていたが、野菜栽培に切り替え親子三代で一緒に暮らしている。(タバコは、昔はこの地区の主要な産業でした)

2) 東京から脱サラして来た30代の親子。

2年間の農業指導を受けてこの地に自分の土地を耕し、野菜作りが始まった家族。サラリーマン時代は子供と過ごす時間もほとんどなかったのが、収入は半分になったけれど、生き生きとして暮らしている姿であった。奥さまの「うちの子供たちはここにきてからこの人(ご主人)のことを父親だと知ったみたいです。それまでは時々顔を見かける人だった」の言葉は強烈でした。



3) 八郷地区の茅葺屋根を葺く職人さんに若い職人が加わり、必死に技を覚えていく。この地区に伝わる茅葺屋根は「筑波流」という独特の葺き方をしています。

この地区は日本の里山100選に選ばれており、都会からこの地に移り住む人も多い。

また果樹団地も多く、梨、りんご、柿、イチゴ、ブルーベリーなどのほか、有機栽培の野菜を始め、豚も有名です。

都会がいやになったら是非来てください。癒されること請け合いです。

### ○ 府中と山根

昔からこの辺りにおられる方は「府中と山根」ということでわかるようですが、今はあまりこの呼び名は使われません。「府中」は旧石岡市域で、「山根」は旧八郷地域をさします。

「府中」は常陸府中で石岡になる前に呼ばれていた名前です。その中で茨城(常陸府中Ⅱ常府)と静岡(駿河府中Ⅱ駿府)は府中の名前は変わらざるを得なかったようです。しかし武蔵府中は東京都府中市となり、甲斐府中は甲府市、周防府中は防府市、備後府中は広島県府中市などと名前が残ったところも数多くあります。常陸府中は「石岡」(由来はよくわからない)となりました。

石岡の市街から旧八郷地区(柿岡)に入ると筑波山から加波山の山並みが目に飛び込んできます。また石岡の台地から見ると比較的低地となっていて、山の麓に霧がかかっていることも良くあります。柿岡地区に入る手前に「下林」「上林」地区が

ありますが、この「林」という一見なにもなさそうな地名なのですが、実はたいそう古い地名のようです。平安時代に書かれた和名類聚抄にも常陸国茨城郡の中に「捍師郷(はやしのこう)」という郷名が出てきます。祈禱師のような人が暮らしていたのでしょうか。

この地域は恐らく現在の柿岡地区なども含んで呼ばれていたと思われます。出雲風土記にもこの名前が出てきますので出雲系の民族であったのではないかと思われまます。

江戸時代は山の麓に広がっているので山根地区と呼ばれ、五十三か村がありました。その中から染谷村と村上村が石岡に編入されました。また、残りの村々も合併していき、柿岡町・小幡村・葦穂村・恋瀬村・瓦会村・園部村・林村・小桜村の1町7村残りしましたが、昭和30年にこれらが合併して八郷町と命名されました。都会からこの地区に移り住む人も多く、皆この八郷(やさ)という響きが好きな方が多くいるようです。私もこの八郷という名前は好きです。八郷地区は結構広いです。

### ○ 佐久良東雄旧宅 浦須 314-1

雨が上がった後に常陸風土記の丘を訪れた。すると公園入口にある曲屋という江戸時代にできた古民家(蕎麦屋)の藁葺屋根に日が当たって一気に蒸気が立ち昇っていた。これを見ていたら八郷地区の柿岡手前にある佐久良東雄の生家を訪ねてみたくなり行ってみた。

佐久良東雄(さくらあずまお)はあまり知られていないが大変重要な人物です。桜田門外の変

や安政の大獄などの言葉は知っていても具体的な内容はあまり興味もなかったかもしれませぬ。墓は若い時に住職をしていた土浦市真鍋にある善応寺(土浦一高の手前の坂下)にあります。名前の「佐久良」は桜です。「東雄」というのも「日本男(こ)こにあり」ということで名前をつけたと思われる。本名は飯嶋吉兵衛です。この生家は「飯嶋」氏宅であり、今でもここで生活されています。



佐久良東雄(さくらあずまお) 生家

場所は、石岡市街方面から柿岡の市街へでる少し手前(恋瀬川を渡る少し手前)の右側に小さな標識がある。そこを右に曲がってそのまま道に沿って進むと右手に案内板がある。

佐久良東雄(さくらあずまお)は幕末の勤皇歌人(熱烈な愛国者)として知られ、若くして(9歳)仏門に入り、15歳で万葉和歌を得度し、22歳で

近くの観音寺（石岡市下林）の住職となり、25歳にして土浦の寺（善応寺）の住職となった。しかし、この頃から王政復古への思いが強くなり、土浦藩、水戸藩などの藩士や国学者など多くの友人との親交があった。32歳で仏門より還俗し、その脚で鹿島神宮へ参詣し、桜の樹千株を奉獻している。（東雄桜として鹿園の反対側の森に残っている。）

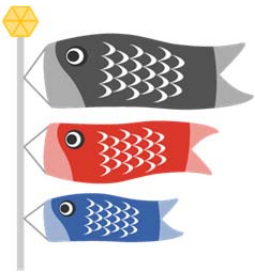
その後関西に移住し、大阪の座摩神社の神官を務めつつ尊王思想の普及に努めた。桜田門外の変に参加した水戸浪士たちをかくまった罪で捕縛された。獄中で「吾、徳川の粟を食（は）まず」として食を断ち、万延元年（1860）6月27日に獄死した。享年49歳。

この生家は主屋・長屋門・土蔵そして生垣があり、いかにも旧家らしい風格を感じさせる。

主屋は茅葺の寄棟造で、本地方の代表的な古民家。建設年代は、主屋・長屋門とも18世紀中頃と推定されている。

東雄の遺体は罪人として取り扱われたが、後に徳川（水戸）家の援助で大阪の天王寺に埋葬された。その後いくつか改葬されたが、昭和7年に東雄が住職をしていたという土浦の善応寺に改葬され、忠霊堂が建設された。東雄の隣には大久保要の墓もある。

歌人としても評価は高く、佐々木信綱は「勤皇家中第一の歌人」と賞しているという。



## 我が労音史（17）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

### 1987年の社会情勢と音楽状況

政府は売上税法案を国会に上程し、多くの反対で否決され廃案になる。安田火災がゴッホの絵画を53億円で購入、国鉄分割民営化による6社が発足（JR）田中角栄元総理がロッキード事件控訴審で有罪が確定（懲役4年）。バルト三国が独立要求のデモを起こす、東独ホーネッカー議長が西独を初めて公式訪問。国税庁の基準地価発表で85・7%（東京）の高騰（バブルが始まる）。ニューヨーク株式が大暴落、円高ドル安が加速しアメリカへの投資が激化。民営化したNTT株が狂騰し160万円の初値。大韓航空機がミャンマー沖に墜落。

全国の労音会員を始めとするカンパや資金提供で1970年に建設された「全国労音会館」は、全国の労音運動の拠点として、多くの民主団体や芸術創造団体から使用されてきた。然し老朽化が目立ち、再建・改築・売却（新建設）の三案が検討され、六月の運営委員会で三番目の売却（新建設）の方針が決まった。

各オーケストラ団体・音楽マネージャー協会が売上税に反対を表明。大分市民有志合唱団が清瀬保二作「無名戦士」（東響・佐藤功太郎指揮、63年東京労音委嘱作品）を大分文化会館で上演。カザルスホールが開館。ソ連のブーニン（P）が

「赤旗まつり」出演のため来日。この年逝去の音楽家・文化人は、森正（P）砂原美智子（ソプラノ）渡辺晋（芸能プロモーター）石原裕次郎（俳優）鶴田浩二（俳優）カバレフスキー（作曲家）セゴビア（G）ハイフェッツ（V）

### 1987年の労音の動き

第35回東京労音総会は、中曽根政権が「売上税」導入を固執している政策と企業や地方自治体が主導する音楽会・文化催事が強行される実情が提起された。運動の総括では一昨年から新しい運動体制を確立したことで、事務局に依拠した活動から脱皮。地域・ブロックの活動家がサークルを主体とした活動を進める、そのために其々の地域・ブロックが“独立労音”として活動の展開を目指すことを確認。

この年の活動は、ブロックの運営委員会が方針と計画を立て労音運動を大きく前進させた。それは、地域例会と民族音楽教室運動に代表され、それらの活動に伴って地域委員会の確立や活動家を増やす事と関連付けられた。民俗音楽教室（箏・三味線・笛・太鼓等の日本楽器）は、千代田・中央。港の各区と東部・南部のブロックで開港され、日本の伝統音楽を学び活動家を育成、各地での音楽文化の発展・拡大と普及に大きな力を発揮。これらの総括として、次の実践内容が挙げられた。

1) 事務局体制縮小のなかで、委員を始めとした役員が日常運営に携わり、会議や催しの運営を民主化。

2) ブロック運営体制の指導性を高め、活動家（委員）を増やし、経済的に独立した体制を作る。

3) 事務局依存の活動を改善し、自覚的な活動

を進める。

問題点として、各地とも一定の成果を上げているが、組織的力量が地域への影響力を持つには不十分で、引き続きサークル建設や委員の拡大に力を入れ、更なる地域委員会の強化を図ることが求められている。

例会面では、全国労音共同企画の「モスクワ音楽劇場バレエ」の再招聘で、定番の「白鳥の湖」に加えて新作「ブラボー！フィガロ」が初演（NHK TVで放映）され、バレエ界に影響を与えた。演奏関係では、ピオトル・パレチニ（ポーランド）ターリヒ弦楽四重奏団（チェコ）コンソルティム・クラシクム（西独）ロス・カルカス（ポリビア）を企画。内容は各演奏家の特色が存分に生かされ好評だった。なかでも、西独の室内合奏団は、埋もれた古典の作品を探し出し、卓越した演奏で高い評価を得ている。この年の第九交響曲は、都響（若杉弘指揮）にソリストをヨーロッパから招聘し、地域からの合唱団500名で二回の公演を成功させた。合唱団の組織に当たっては東部ブロックが中核的な役割を果たした。

バツハからマラーまで、クラシクムの作品に自作の歌詞で歌う斎藤晴彦の「音楽の冗談」（新日フィル演奏・伊達英二共演）は、笑いに満ちた内容と世相を風刺し、和ませる例会で会員を楽しませた。サークル強化と会員拡大のための地域例会は18回行われた。そのなかで、ブロック共同企画として取り組まれた、「ロス・カルカス」（ポリビア）は、優れた演奏力量で高い評価が得られ5回の地域例会を組織的にも成功をさせた。他に、「荒馬座」や「花かご・統一劇場」の取り組みでは、

取り組んだ地域の要求と結合して多くの成果を生んだ。ポピュラー例会の全国共同例会「柳ジョージ」は、全国13回公演の一環として東京でも取り組み、迫力ある舞台・演奏で好評。その他、藤沢蘭子・上条恒彦・さとう宗幸・岩崎宏美の企画は豊かな歌唱力で会員を楽しませた。

例会外の活動として、関東労音合同のスキー友好祭は、上越塩沢で開催され東京から250名が参加。夏の友好祭は西湖で開催、200名が各地域から参加。友好祭の趣旨である友好と相互交流を深めたが、参加者が年々減少している。原因としては、活動力の低下や若者の組織化離れ、企画のマンネリ化がある。毎年新春に開催される「新春交流会」は、労音会館で100名が集まり、参加者相互の経験交流が行われる。

第9回播州労音大学は姫路で開催され「労音運動の歴史と展望」をテーマに、労音の創始者須藤五郎氏の講演を受けて、25労音613名が参加し交流を深めた。第33回全国労音連絡会議は、全国労音会館に63団体163名が参加し開催。テーマは、会員制の確立・民主運営・共同企画・ブロックの強化について話し合われた。全国の例会総数は778例会（内共同企画は691回（76%）。年末から年始にかけて、ロシア民族アンサンブル「カラゴト」とロシア民族歌手ズイキナの招聘と交流のための訪ソ労音代表団（団長木下明男）が全国から26名派遣された。全国の労音数84団体2000名。

つづく

石岡市指定文化財（二十一）

兼平智恵子

里山は コロナシャットアウト

春のフアッシュンショー

刻一刻と迫りくる新型コロナウイルスという魔物。密閉空間、人の密集、密接での会話。三密を避ける。

手洗い、マスク装着の厳守。

身体に異常を感じた時には、石岡市民の皆さんは土浦保健所029-821-5342へ問合せ下さいとの事（三月二十八日石岡市役所電話にて確認）。

そして国や市役所に望むことは、早期発見、早期治療、早期隔離の為にPCR検査を簡単に受ける事ができますように。

一日も早い治療薬のワクチンが開発されますように。

今、自分に出来ることを自覚し、この危機を乗り越え、一日も早く平日を取り戻したい。

これからもどんな難儀な事が起きるか分かりません。その難儀に対応出来る自分になりたい。

心に残った東京都小池知事の言葉 「一人一人の行動が社会全体に影響を及ぼす点を踏まえて協力して頂きたい」。

全世界一丸となって見えない悪魔から平和を勝ち取りたいと切に願います。

本題の石岡市指定文化財の紹介に入ります。

関川文書一括

若宮一六一―三一

（市立図書館）

有形（古文書）

昭和五三・八・二三指定

関川文書は、江戸時代徳川の領地であった現在の関川地区に残された文書で、一六〇〇年代の地検水帳（耕地の面積や生産力を検査したもの）や年貢割当等が現存しており当時の支配体制や農民の姿を知ろうと貴重な文書で、その他、人別送り状など幾つかの文書がまとまって保存されています。関川地区とは明治二十二年町村合併に際して井関村と石川村が合併して出来た村名で、井関の「関」と石川の「川」と調和のとれた名がつけました。その後昭和二十九年十二月一日石岡市に合併して現在に至っています。

ここでそれぞれの村の文書の一部をご紹介します。

#### 井関村人別送り状（嘉永三年七月）

人別送り状

一 女老人

ちよ

年廿一才

右ハ当村百姓安兵衛娘其御村御百姓丈介嫁二縁付  
参り候間村方人別相除申候依而ハ其御村人別二御  
組入れ可被成候  
以上

弘化二年巳七月

水戸御領

井関村

庄屋

長次（印）

土屋采女正様御領分

成井村

御名主

村右衛門殿

近世の農民の家族の基本は夫婦と子供、それに親を含めた小家族であり、まれには独身の兄弟や奉公人もいました。彼等は「人別帳」に登録され、それぞれの人数・土地保有高に応じて、年貢米の上納や助郷役を勤めました。近世（日本史では江戸時代をさす）の農民は一般に他の村への移動を禁じられていましたが、婚姻・養子縁組・開墾による入植などで移動することは、頻繁にあり、移動にあたっては「人別送り状」が送付されました。

#### 明和5年 石川村年貢皆済覚

近世の年貢の賦課はまず村高から水害などの為に耕作出来ない耕地や免租地を控除し、残りの高に対して一定の税率を掛けて、年貢米を算定しました。

井関・石川村では田畑に米納・金納の年貢がかかるほか、水戸藩領の特徴として「三雑穀」と呼ばれる大豆・稗・荳（え・え）まの古名）が金納に換算して徴収されました。

この石川村年貢皆済覚（かいさいおぼえ）は明和4年分の年貢が完納されたことを証明して水戸藩の郡方役所から村方に残された石川村の「皆済目録」で、収穫期に年貢賦課量を予告する「年貢割付状」と一対をなすものでした。

参考資料

石岡の歴史

石岡市の文化財

石岡市史中巻1

石岡の地名

危機

伊東弓子

“御留川”の事も一区切りつけて、新たな出発はどんな風になるのだろうか、という不安を抱えながら三月の学習会の準備にはいつていた二月初め、恐ろしいニュースが流れた。それが広がっていく中で、原因や予防がはつきりしないまま、世界地図が次々に赤く塗り潰されていった。二月半ばになるとあちこちで活動の休みが始まった。私も少し躊躇する気持ちにもなったが、茨城に未だ患者が出ていない事で決断し実行した。批判もあつたが無事に終り二週間以上過ぎた今も何ら変化はない。

改めて多くの活動が停滞している様子を考えていた。“石佛の会”は半分休み状態だ。纏めて保存する様な手だてをとって地域に紹介しなければ仕事中途半端だと思ふ。それから会の事を考えてもいいと思ふ。“玉里の史蹟と自然を護る会”も年令が大きくなって、労力的に無理が利かなくなつたとのこと。八井の周りは雑草が茂りその中に何株か可憐な花ダイコンの紫色の花が揺れていた。水底に土が流れ浅くなつていた。高井の竹が倒れ人の訪れを拒んでいるかの様だ。初代会長が目にした状況に戻つた様だ。“古文書研究会”とは立派な名を付けてやってきたが、先生の教えは忘れずに少人数でも続けている。館山神社の古書・古物を整理する会、も立ち上げてから間もなく一年になる。少人数でも丁寧に作業を続けている。活動の中でも調査したり、研究したり学習していく集いがなくならないように願っている。子供会、婦人会、老人会、農協婦人部など地域と密接に繋がっていた活動が消えていったのは残念

だ。形を替えたり名前が変わって、コミュニティとかサロンとか女性の会など今の時代の新しい組織になったようだが、補助金を当てにせず本質を大切に活動であつてほしいと願う。

其れはともあれ、しみじみ村”の活動は地道に続けられている。白井先生との出会いもこの活動の中からだった。うさぎまつり、瀧平二郎氏のきり絵を使つての大型・小型の灯籠づくり、それを利用した活動は現在も続いている。市内の会員が減る中、土浦・つくば・水戸からの参加を得て地域活動を行っている。中でも月二回（第二、第四土曜日）早朝の塵拾い、霞ヶ浦堤防沿いを一時間拾う、そして分別する作業だ。遠距離からの参加者に油代も払えない状況だが心で来てくれてるようだ。身の回りの塵の事みんまで実行して頂きたい。“ふるさと風”の活動は、白井先生と菅原さんを失つて、七人の会員と賛同者数人に支えられている現状だ。資金の面でも非常に苦しい。それでも霞ヶ浦周辺の歴史を掘り起こし、今の生活と結びつけて将来への夢を見つけていきたいと頑張っているところです。感じることも是非投稿してください。一緒に夢を作る仲間になつてください。

老いていく会員が増える一方、新しい会員を誘う努力はどのグループをみてもしていないようだ。それどころではないのか、気がないのか、現状維持で精一杯なのか、兎に角活動が解散にならない前に、自分達が何故この活動をしてきたのか・・・確り話し合つてみるべきだと思う。

道路が良くなつて喜ぶのは誰だろう。“良くなる”というのは、どういう立場から見ているのだろう、と何時も思う。それは車を使える人達の側

からだ。私も乗せてもらつて便利だ、良い道だ、有難いものだと感じたからわかつた。しかしその便利さやスピード感で、ものごと全てを考える人が多くなつていいる。早く出来る・急ぐ・面倒くさい・もたもたしてんな・のろのろしてんな・ふらふら危ない、それらは弱い年寄、子供に対して吐かれる言葉だ。厳しい言葉だ。悲しい言葉だ。自分達（運転する側の人）が思うように走れないから、又事故になれば責任とるのは車の方だと怒鳴る。道は誰のためにあるのだろう。造られるだろう。と老いの増した自分に問いかけるこの頃、弱い者を守つてくれる筈の歩道はない場合が多いし、あつても粗末なものだ。段差があり、破損したままの所があり、塵が投げられる状況、緊張のしどろしど歩いたり、自転車走らす。

でも道路は次から次へと造られている。止むことなく、一時的にお金が入つて喜ぶ人、リベートを貰つて儲ける人、喜ぶのは極一部の人のだ。鳥は、虫は、動物は何処へ追いやられたのか、植物は踏み潰され土になつたのか、こういう扱いをしている人間に対して、何か被害が降り懸つてくるのではないかと思うと背筋が寒くなる。

人間は遊びほうけ過ぎていいるように思う。情報網に操られ、其処へ行かねば損をする。そんな思いで人は流されているように見える。よく言えば好奇心や向上心から来るのかもしれないが、そうしてお金を使う事が地域の活性化に必要なのかな・・・と不思議で仕様がなない。山々の木々が切られ、草が取られ一面の水色の花で包まれる丘に変わる。谷津田に米は作らず、ピンク色の花畑に色塗られ、野菜は植えず畑は黄一色の絨毯が敷かれたようになる。そんな中で「わあ！綺麗！」と、

少女の如く歩いていく。それも幸せの一つだろうか。

その丘には木が必要だし、谷津田には水辺も大切な筈、畑には畑で育てなければならぬ物がある筈、この新型コロナウイルス発病の中で私達の食物の事も確り考えていかないと大変だろうと心配だ。こんな風に変身し装おつた田畑もあれば、草ぼうぼうの耕作放棄の土地が目立つ。何事か起これば食糧はどうなるという事、真剣に考える人は、仲間はいないかな、否考える仲間を作らなければ・・・

「僕ね、カメレオンの事、詳しいんだ」という子の話を聞いていた。

「餌さは買うんだ」

「難しくないんだよ。説明書通りにする」

「可愛いんだ」

遠い国にいる動物だよね。と問うと、

「でも、簡単だよ」

私は、じゃ、かまきりやだんご虫は知つてると聞いてみた。

「いや、そんなの知らないよ」

と言う。庭や野原へ行つて遊ぶのかと聞くと、

「そんな暇なんかないよ。情報集めで忙しいんだよ。とのことだった。」

頭が進んでいるのだろう。驚いた。今自分と一緒に生きている周りの事には関心もない。これからはこういうタイプの人が多くなるのだろう。ネットや機械で仕入れた知識をもとに物を見、判断し良しとする姿勢、他の人の意図などは全く解さない人種のように思えた。

梨の枝を剪定しているOさんに会った。一本の木をの全体を見て切り落とす枝を決め作業していた。

何時か経つと奥さんも一緒に小枝を拾い集め束にしていた。その一束一束に形整って美しく見えた。その後、柿の栽培をして日さん夫婦も同じように柿の枝を束ねていた。数少ない果物作りの農家の夫婦は、丁寧な作業をする中に次の年の豊かな実りが繰り返され、年月を重ねて来たのだと頭が下がった。こういう姿は数少なくなっている。やがて夫婦の片方が作業を出来なくなると、伸び放題になっていくのだろうかとか心が落ち着かない。でもどう仕様もない。

その反面、田畑に散らばっている肥袋、ホス、ビニール袋など心ない耕作者もいる現状。

幹から上にかけて苔生した皮、輝の入った皮を付けた幹が確りと土の中に根を這っている。細い枝は確り天井を向いて伸びている。大元に支えられて確実に伸びて世代交代していくのだろう。人の世も大自然に習っていくといけれど、手本とすべき自然を壊しているのだから仕様がなない。

人間生活の中には“危機”と思われることが沢山ある。この機会に見詰め直し、行動に移せるよう、みんなで取り掛からねばならないですね。

## 100年ごとの疫病

小林幸枝

1720 ペスト

1820 コレラ

1920 スペイン風邪

2020 コロナウイルス感染

疫病の流行周期がほぼ100年という。

ここまで来ると偶然とは思われません。

また、2002年には「SARS」が世界的に流行しました。

撃退してもまた新たなウイルスが出てきます。

根絶するのは難しく、人間は永久的にウイルスと戦わなければならないのかもしれないね。

早く新しい特效薬を研究してくれないか？

ドラッグストアに行ってもマスクは売り切れ、品薄、在庫無しだと騒いでいます。

こんな状態で、店員に文句を言っていた方がいました。

それより、マスクを手作りしたら良いと思いますよ。私も実際に自分で作った手づくりマスクをしています。

デマや詐欺などが増えたようですので、弱者と高齢者は騙されないように注意して下さいね。

もしも、体に違和感を感じたら、素早く病院へ行って検査して貰いましょう。

このウイルスが早く終息するように祈っています。

皆さん、気を付けて下さいね。

## 父のこと(20)

菊地孝夫

〈またしても寄り道〉

またしても言い訳になってしまふけれども、新型コロナウイルス—COVID19—の影響で、図書館が閉まってしまつて、調べたい資料が閲覧できないので原稿が書けなくなっている。借り出してきた書籍もみんな読み終えてしまった。自粛ムードが広がる中、すこしでも何か楽しいことを書ければいいかなと思つただけれど、あいにくのところふさわしいネタが見つけれない。

行くところがなくなつてしまつて、ほとんど外出しないので、いきおいTVばかり見ることになる。そのおかげで、画面に登場する多くの人の本音が垣間見えた。

このような非常事態の時は、指導的立場にある人物—知事とか首長とか議員とか財界トップとかJOCの幹部とか—の力量の差がはつきりと見えてしまふ。

信頼できると思つていた人の話していることは、ほぼOKだった。怪しいなと思つていた人物は、やっぱりなというコメントしか言っていない。

このような時決まって持ち出すのが、横文字や間





きなれない熟語になる。今回も不必要な横文字が乱発された。

さすがに今度ばかりは、「想定外」という言葉は聞かれない。最近のウイルスによる大規模感染の危険性は、専門家によってたびたび指摘され続けていたからにはほかならない。

初動の時に、危機対応の専門家が一人もメンバーに入っていないという事には驚いた。

対策を小出しにして、様子見ばかりしている印象がぬぐえない。

中国や韓国をあれこれ言う前に、例えばドライブスルー式の大規模検査の実施や、短期間で巨大な隔離・治療施設を作りあげたという事を、素直に評価し、国内でも同じ方法を早急にとるべきだった。

ひとつというと、地球温暖化によって、シベリアをはじめとする広範囲の永久凍土が溶け出し、氷河の万年雪も溶け続けている。この中にも太古に封じ込められ、休眠状態にある未知のウイルスが多くあるはずで、現在でも、次々に覚醒し続けているだろうことは容易に想像がつく。

或いは、アメリカで行われているシェールガス油田の掘削によって、地中奥深く眠っていた未知の病原体が現れることだって考えられる。

そのほとんどは人類には無害なのだけれど、とんでもないモンスターがいる可能性もある。

これがSF小説の世界だけだと思いたいと思う。

早くからシーズンに入って、くしゃみがひどいので、花粉症のマスクを買いに行ったら、店員さんに「今頃買いに来たのか」と呆れられてしまった。

連日のようにドラッグストアの棚が空っぽになり、店の入り口に長蛇の列が続くさまを見せられれば、人々が不安に駆られて、買いに走るのは当たり前行動だろうとは思っている。

仕方がないので、使い捨てのマスクを台所用洗剤を使い、お湯で洗って使っている。

初動の段階で、マスク不足が想定されるのに、お偉いさんときたらネット上の取引は、即時中止ではなく先送りということにした。

そのために、この隙間を縫って、県議員ともあるうものが、ちゃっかり高値で売ってぼろ儲けをしていた。

さらにこれがトイレットペーパーや消毒液・ガレージに波及するのを見て、今度はこつちが呆れた。

根拠のないツイッターの〈フェイクニュース〉によって、トイレットペーパーの買い占めが始まり、昔の石油危機のときとそっくりの光景が展開された。

テレビなどがこれを無責任に報道したために、なおさら、騒ぎが広がってしまった。国内の製紙会社の生産能力は、十分な余力があり、不足することとはあり得ない。こうした常識を、報道機関などが速く伝えていればよかったのだ。

視聴率重視のあまり、こうした面白半分報道が相変わらずちつともなくならないのはどうしたところだろう。

マスコミの中には経済専門の記者が多数いるはずで、製紙会社に電話一本して問い合わせれば済むだけの話でしかない。毎日のように空っぽになった棚を見せられ続けられれば、これもまた心配になるだろう。

首相の政務官である国会議員が、立食パーティー

だからかまわないだろうと、能天気パーティーをやったりしている。

オリンピックの聖火リレーを、数万の人が集まるのがわかっていながら強行した。無観客とはいいながら連日大相撲が行われ、NHKテレビではそれが放映された。それでいて、他方では人が集まるのは自粛しろという論理矛盾を平気でやっている。

それならこつちは一体どうすればいいんですかいな？

イタリアから始まったルネッサンスの流れも、大規模な疫病の終息を契機に始まったという事をTVのコメントによって改めて教えられた。

(この点はまことに不勉強ですみませんね、と謝るしかない。)

今回の事態は、過去に経験したことのない大きな転換点になると思う。経済や医療だけでなく、文化や思想などあらゆる分野が一挙に変ることになると思う。このところ広まったジャパン・ファーストとかトーキョー・ファーストとかの「一国主義」が、もはや通用しないという事がはっきりした。

このところ立て続けに起こる災害から、新しく再生する道を模索すること。それがこの風の会が掲げる地方でのルネッサンスだと思っただがどうだろうか。

と同時に従来の発想にとらわれない、新しい発想を持つ必要性も求められる。

幾人かのコメンテーターの中に、新しく信頼できる人を見つけられたのが大きな収穫となった。

こんな時こそ意見を聞きたい人が二人ばかりいる

のだが、なぜかしら二人ともTVに登場しないのはとても残念なことだ。

また、言わずもなかも知れないが、医療・介護などの最前線では、困難の中でも黙々と働く多くの人々がいることには全く頭の下がる思いがする。N95という医療用マスクやフェイスガード、手術用手袋、保護服などが不足しているという。こうした中で、自らの感染の危険も顧みず、働き続けている。

学校が臨時休校になったので、大部分の子供たちにとっては、予定外の長い休暇となった。彼ら、彼女らにとっては、卒業式が縮小されたり、終業式がなくなったりと、いくらか淋しい思いがあったかもしれない。けれども、今年の出来事が、長く、強く記憶されることは間違いない。

ジュール・ベルヌの有名な小説「十五少年漂流記」はたしか原題が「長い休暇（ロング・バケーション）」と言ったと思う。

孤島に流された15人の少年たちが、様々な困難に出会い、時に反発しながらも、最後には和解し、その中で見事に成長していく物語である。2か月の楽しいはずの休みが、2年間の長い休暇になってしまう。

この予定外の不定期の休暇をどう過ごせばいいかという問いに対して、学生・生徒なのだから勉強に当たたらいいと言ったのは、某大学の先生である。賛同できる一見識だと思う。

蛇足として、アルベルト・カミュは「ペスト」という小説を書いている。「異邦人」「転落」「追放と王国」は読んだが、その時に「ペスト」を読んだかは記憶にない。1940年代にフランスの植民地であったアルジェリアを舞台にしている。

イタリヤの作家、ジョバンニ・ボツカッチョの「デカメロン」が書かれたのは、ルネサンス期のことだ。疫病を逃れた上流階級の人々が城にこもり、廻り番で10人が十日間で十話ずつ、合計百の物語を話すという筋立てになっている。

つまみ読みした記憶があるけれど、十代か二十代のことなのでこれも記憶がはっきりしない。以前にも書いたように、ほとんどの本を捨ててしまったので、もう一度見直せば記憶がよみがえるとは思うけれど、いまになつては無理のようだ。

今の時点・3月28日・で、このウイルスに対するワクチンはおろか、治療薬すらないというのが大きな問題。もう一つは大都市圏への人口の集中がある。

どうやら、こうした流行は「減衰曲線」を描いて収束するらしい。大きな波が収まるように、いくつかの波が少しずつ小さくなっていつてやがて収束する。

最悪の状態を想定し、そこから対策を模索するのが危機管理の王道なのだと思うている。

〈カオス〈混沌〉の先にあるものは〉

丁度偶然にも韓流ドラマでは、「ホ・ジュン」という番組を放映していた。昔の朝鮮で、苦勞の末に医学書を編纂するという大事業を成し遂げた人物の一生を描いている。

そのなかで、正体不明の疫病の蔓延を防ぐという功績を上げる。伝説の名医の話なので果たして本当かどうかはおくとして。

また、ミラ・ジョボビッチ主演の「バイオ・ハザード」という映画シリーズもある。アンブレラ社

という巨大な製薬会社が、遺伝子操作によって作られた病原体をバラ撒くことで、パンデミックが起り死者がゾンビ化してしまうという、人類破滅物のSFである。

シリーズものにはつきみもので、最初のインパクトが薄れていつて次第に面白さがなくなってしまう。あとは女主人公の超人的な身体能力で、見せ場を作るしかなくなってしまう。

ハリウッドは破滅物が大好きなようだ。大地震だったり、大洪水だったり、宇宙人襲来だったり。或いは巨大隕石の衝突だったりする。そこでは、超人的ヒーローが現れ、見事に人類を救う。

最近はその逆に、女主人公が登場することが多くなっている。昔のパニック映画では、ヒロインはひたすら「キヤァー キヤァー」と悲鳴を上げて逃げ惑うだけだった。

「エイリアン」のシガニー・ウィーバーあたりから、はっきりと風向きが変わった気がする。彼女は長い戦いの末に、最後には女王蜂のようなエイリアンのボスをやつつけてしまう。

これまでも女主人公が活躍する映画はたくさん作られてきたが、男性からの視点だった。

「ガラスの天井」と言われている、女性の社会進出を阻むもの一つには、同じ女性があるという事を象徴しているように思える。そしてそれを乗り越えるのは、ほかでもない同じ女性でしかないということをもっせーじとして言っている。

現在進行形の、答えが見いだせないこの世界的な混乱の行き着く先に、誰一人として思い描かなかった明るい未来が開けることをひたすら願うのみだ。

今住んでいるマンションに、近々ようやくケーブルテレビが引かれるという事なので、見逃してしまった数々の名作映画が見られるのを楽しみにしている。



#### 「昔話について」(四)

木村 進

怪談話「こんな晩」「六部殺し」など(その二)

もう少し違った観点の話しも探ってみましょう。

#### (5) 小泉八雲「持田の百姓」 (出雲の昔話)

昔、出雲の持田浦という村に貧乏な百姓がいた。子供が次々と生まれたが、育てられる余裕がないので、夜に、こっそりと川に流して殺した。こうして6人の子供を殺した。やがて、百姓は少し暮らしが楽になった。そこで、7人目に生まれた男の子は育てることにした。子供はすくすく育ち、百姓はこの子をとても可愛いと思った。ある夏の夜、百姓は5ヶ月になる息子を腕に抱いて庭へ散歩に出た。大きな月が出て、美しい夜だった。百姓は「ああ、今夜めずらしい、ええ夜だ」と言

った。

するとその子が、父親の顔を見上げて、急に大人の口調で言った。

「御父つあん、わしを仕舞いに捨てさした夜も、ちようど今夜の様な月夜だね」そう言って、また元のような赤ん坊に戻った。

…百姓は出家して僧になった。

\*\*\*\*\*

この話は六部ではなく、貧しくてわが子を処分してしまった話です。

小泉八雲(ラフカディオハーン)が出雲地方の昔話として書いています。恐らく日本で結婚した妻から聞いた話なのでしょう。

次は落語から一つ紹介します。

#### (6) 落語「もう半分」 (三遊亭圓朝作の怪

談噺 5代目古今亭志ん生などの演目)

千住小塚っ原に、夫婦二人きりの小さな酒屋があった。こういうところなので、いい客も来ず、一年中貧乏暮らし。

その夜も、このところやって来る棒手振り(ぼてふり)の八百屋の爺さんが

「もう半分。へえもう半分」

と、銚子に半分ずつ何杯もお代わりし、札を言って帰っていく。

この爺さん、鼻が高く目がギョロっとして、白髪まじり。薄気味悪いが、お得意のことだから、夫婦とも何かと接客してやっている。

爺さんが帰った後、店の片づけをしていると、なんと、五十両入りの包みが置き忘れてある。

「ははあ、あの爺さん、だれかに金の使いでも頼まれたらしい。気の毒だから」

と、追いかけて届けてやろうとすると、女房が止める。

「わたしは身重で、もういつ産まれるかわからないから、金はいくらでもいる。

ただでさえ始終貧乏暮らしで、おまえさんだって嫌になったと言ってるじゃないか。

爺さんが取りにきたら、そんなものはなかったとしらばっくれりやいいんだ。あたしにまかせておおきよ」

女房に強く言われれば、亭主、気がとがめながらも、自分に働かないだけに、文句が言えない。

そこへ、真っ青になった爺さんが飛び込んでくる。

女房が気強く「金の包みなんてそんなものはなかったよ」と言っても、爺さんはあきらめない。

「この金は娘が自分を楽させるため、身を売って作ったもの。

あれがなくては娘の手前、生きていられないので、どうか返してください」

と泣いて頼んでも、女房は聞く耳持たず追い返してしまった。

亭主はさすがに気になって、とぼとぼ引き返していく爺さんの後を追ったが、すでに遅く、千住大橋からドボーン。身を投げてしまった。

その時、篠つくような大雨がザザーツ。

「しまった、悪いことをした」と思っても、後の祭り。

いやな心持ちで家に帰ると、まもなく女房が産気づき、産んだ子が男の子。

顔を見ると、歯が生えて白髪まじりで「もう半分」の爺さんそっくり。

それがギョロつとにらんだから、女房は「ギャーッ」と叫んで、それっきりになってしまった。

泣く泣く葬式を済ませた後、赤ん坊は丈夫に育ち、あの五十両を元手に店も新築して、奉公人も置く身になったが、乳母が五日と居つかない。

何人目かに、ようようわけを聞き出すと、赤ん坊が夜な夜な行灯(あんどん)の油をペロリペロリとなめるので「こわくてこんな家にはいられない」と言う。

さてはと思つてその真夜中、棒を片手に見張つてみると、丑三ツの鐘と同時に赤ん坊がヒョイと立ち、行灯

から油皿をペロペロ。

思わず「こんちくしょうめッ」と飛び出すと、赤ん坊がこつちを見て「もう半分」

\*\*\*\*\*

こんな話です。金は娘が身を売ってこさえた金という。

まあいずれにしても西洋では死んだ人の霊が乗り移るとされる話はたくさんありますが、仏教ではどうも生れ変わり思想が強いようです。

少し話のルーツを探るために、もう少し古い話を調べてみましょう。奈良時代の説話から一つ

(7) 日本霊異記(中) 中田祝夫

第30 行基大徳、子を携ふる女人の過去の怨みを視て、淵に投げしめ、異(めづら)しき表(しるし)を示しし縁

(現代語訳より)

行基(大徳)は、難波の江を掘り広げて船津(船着場)を造り、仏法を説いて人々を教え導いていた。そこには、道俗貴賤(僧、俗人、高貴人、貧しいもの)を問わず、みな集まって来て法を聞いた。

そのころ、河内国若江郡の川派(かわまた)の里に、一人の女人がいた。子をつれて法会に出席し、法を聞いていた。子供は泣きわめいて母親は法を聞くことができないでいた。またその子は10

歳を過ぎていたがまだ歩くことが出来ず、絶え間なく泣いて、乳を飲み、ものを食べていた。

すると、行基(大徳)は「やあ、女人よ。あなたの子を連れ出して淵に捨てよ」とおっしゃった。これを聞いた回りの人々は「慈悲深い聖人様が、どんな訳があつてこんな無慈悲なことをおっしゃるのだらうか」とぶつぶつ不満をささやきあつた。

そしてその女人もわが子かわいさで、子を捨てに行くことができず、説法を聞いていた。

あくる日もまた子供をつれて来て説法を聞いていた。子供はまた泣きわめいて、説法を聞くことが出来なかつた。

するとふたたび、行基は女を責めて、「その子を淵に投げ捨てて来なさい」といった。

その母親は、聖人の言葉を不思議に思いながらも、子供を淵に投げ捨てに行つた。

淵に投げ込まれた子供は、流れの上に浮き上がり、足をばたつかせて、目を大きく見開いて悔しがり、「残念だ。もう三年間、お前から取り立て、食つてやろうと思つていたのに」と叫んだ。

そして、法会に戻ると、行基聖人は「子は投げ捨てたか」と聞いた。そこで、女人は詳しくいきさつを話した。

行基聖人は

「そなたは前世で、あの者に、なにか物を借りて返さなかつたために、この世で貸主が子供の姿となり、その負債を取り立てて食つていたのです。」と教えられた。

ああ恥ずかしいことよ。人から借りたものを返さないで、死ぬことなど出来ない。後の世で必ずその報いを受けるだろう。そのような訳だから、「出曜経」に、「他人から銭

一文の塩を借りたままにしたので、その後世では、牛に生れ変わり、塩を背負って使われて、貸主に支払った」と書かれているのは、まさにこのようなことをいうのである。

ここでは仏教説話ですから行基菩薩の話となっていますが、この中に「出曜経(しゅつようぎょう)」の話が出てきます。

この出曜経はインドの経典を4世紀末頃に中国語に翻訳されて伝わったようで、かなり古いものといえます。

そんな中に因果応報(いんがおうほう)の話としていくつも語られてきたようです。

こちらの話は、一般には金を奪われたり、借金を踏み倒されたりした者が、その相手の子供に転生して、奪われたり、踏み倒されたりした金額だけ蕩尽したところで早死にするという話です。少し霊として乗り移ることと似ていますね。

「討債鬼故事」として中国の古典などにもいくつか話があるそうです。

(参照・福田素子 討債鬼故事の成立と展開―我が子が債鬼であることの発見―)  
まあざっと調べただけですが、いろいろな話につながりますね。



## 【風の談話室】

### 《読者投稿》

やま(書)らじ(38)

さと女

大変なことになっています。右も左も後もコロナコロナで、上を下への大騒ぎ。グローバルの世の中から昔戻りの鎖国へと・・・一体全体どうなってしまうのか？昨年亡くなった、愛犬のコロナちゃんの世界の悪い病にクルナクルナと言っているような気がします？

・大変な時期ですが、なぜか長崎4人旅。良し悪しは別として、行く先々は大変空いているので、のんびりと楽しい。明日はハウステンボス、今夜はイルミネーションと夜景そして、温泉が楽しみ。長崎方面をうろうろしてホテルには午後9時過ぎ到着、早速温泉を堪能。

・朝目覚めてカーテンを開けると、目の前には、おとぎの国のようなコテージがならびその隣にハウステンボス。10時からなので、その前にホテルからの案内が、舟を出すのでリゾート気分味わって下さい。ちなみにこの旅行姪の娘の卒業記念です。

・二日目は一日中ハウステンボスで楽しむ。チュウリップまつりがまもなく始まるとの事で園内には100万本のチュウリップの植えつけの最中だった。ホテルの前は運河、ゴンドラに乗ったりショーを観たりイベントのハシゴ。途中夜の為にホテルで休憩、まもなく光のファンタジーが始まり幻

想的な世界を体験。私は午後8時にホテルに戻ったが姪たちはまだ帰って来ない。コロナ騒ぎの所為か空いていて、ちょっと寂しいと言っかラッキーと言っか、また来たいです。

・様々な暮らし、ホテルの前は大村湾その前に広がる別荘地、運河を船に乗って説明を聞くと一軒家が130軒マンションタイプが120軒、それぞれ4千万から高い所は7億円だったという。運河には、クルーザーも沢山停泊して居た。隣り合わせはハウステンボス。一体どんな方が住まわれているのか、想像するのも楽しい。

・今日は竹の師匠の快気祝いと遅ればせながらの新年会を兼ねてみんなでご飯を食べた。師匠は山の中で蔓など採取している時、肩を痛めたらしく、暫く養生していた。そんな訳で作業台の上にご馳走を並べて、平穩のありがたさに感謝しながら頂いた。

・お天気に誘われて午後久しぶりに楽市さんに、青空を仰ぎながらまたまた平穩のありがたさをかみしめて。社長は何処にいても働いている。朝ドラのスカレットに刺激されて買った“信楽焼のたぬきさん”を我が家の花壇に・・・どうか 新型コロナからみんなを守って下さい。

・いちご屋さんへ、主Sさんの友人達が集められた。すべてのイベントが中止になった夫も参加。来年に向けて、イチゴの苗を植えた。流れ作業で仕事が進み昼には終わった。里山を眺めながらの作業は何とも気持ちがいい。来年もおいしい

イチゴに育つでしょう！昼ごはんは農家めし、手打ちそばにかき揚げそしてカレー、イチゴは食べ放題。帰りに“ブックカフェえんじゅ”に立ち寄る、其処には色々な男たちが偶然に集まり、何やら大きな話が・・・？

・彼岸中フルーツラインは車の往来が激しく・・・いちご屋さんも忙しいだろう。夫を誘って、彼岸の二日間、お手伝い（遊びに）出かけた。案の定早くからお客様が買いに来てくれて11時頃にはほぼ売り切れ！いちご屋さん夫婦は大きき別にパツク詰め、私はシールをはり箱に入れ出来上がった順に夫が販売です。その後の農家飯、おはぎ、がんもなどの煮物、卯の花、ネギの肉巻き、つつい食べ過ぎ・・・

・今日の散歩道。コロナ騒ぎで全ての予定がキャンセル、空いた時間で毎日散歩しています。藪の中歩いたり別荘地を眺めながら歩いたり、いろいろな発見があり面白いです。別の日、部落の外れから急坂を5分ほど歩くとナダラ力な尾根になり、林道を抜けると二つ先の集落に着いた。見慣れた場所だなと思ったら、鳴滝の案内があり、久しぶりだからI邸に寄って行こう・・・と云うわけで、突然の訪問。出来上がって間もないテラスでご夫婦と歓談、再び山道を歩き家に着いた。山桜も咲いていて、これでコロナ騒ぎがなければ、ウキウキする春なのにねえ。

・明園寺に車を置いて馬滝を左手に見ながら進むと左手に鎖のかかった道がある。山の持ち主に連絡を取り山道を登り始めた。結構な急坂もありハ

アハアしながらも見下ろす集落や山桜にほっとした。途中5人程のハイカーと出会い言葉を交わした。近場でこんなに楽しめる場所があるなんて、暫く忘れていたな。

## 風と共に《理》

大輪 啓展

壺 ふるさと

3月に入り、益々春の陽気が心地良くなって参りました。

依然としてコロナウイルスは予断が許さない状況ではございますが、どんな状況にも終焉がございませぬ。

過ぎず・怠らずを念頭に過ごして参りたいと存じます。

私は常日頃から、理を意識して生活しています。

一言で表せるものではないかもしれませんが、これから述べていく事柄にも、前段で述べました理といった観点からお話しさせていただきます。

さて、「ふるさと」と申しますと、まず初めに故郷が浮かんでまいります。どなたにも故郷があるでしょう。

私にも幼少期を過ごした故郷があります。

小さい頃の思い出は、今となってははっきりと認識出来る事は、とても少なく感じますが、決して無くならないものだとも思えます。

良い事も悪い事も全て含めて、今の自分を形作る1ページとして、自身の糧になると感じています。いえ、今この年齢になって感じることができていくのだと、日々の生活の中で実感しています。

今の世の中、少し気を抜くと付込まれてしまったり、陥れられてしまったりと、過ごし易いとは言いい切れません。今後の世代は今よりもっとそんな世界になってしまうかもしれません。

そんな時にあっても、心許せる・落ち着ける場所が故郷ではないでしょうか？

核家族・過疎化等様々な問題が起きている昨今ではございますが、気持ちが悪く落ち込んでしまったり、どうしようもない現状で誰にも話せない・話したくない、なんて事があつたら、故郷にふと戻ってみてはいかがでしょうか。

また、ふるさとは故郷だけではないとも思います。

ふるさとは、自分の心が安らげる場所という意味では、生まれ育った故郷だけではありません。

人それぞれ心許せる場所・人・環境等様々だと思います。

その心許せる状況こそが、ふるさとと置き換えても良いのではないのでしょうか。

自分の周りにある、心温まる人との繋がり・環境を是非考えてみて下さい。

相手に求める・周りに求める・自分で何もしない、といった事では本当に大切な場所・人・環境は守れません。

どんな状況だとしても、安らぎがあるからこそ頑張れるのです。

自分の行い《理》を見直して、日々の生活が穏やかに・充実したものとなるよう、私自身も含め見つめ直していかなければならないのではないのでしょうか。

私自身こんな言葉をいつも抱いています。

【後でやるうは馬鹿野郎】

今出来る事は後回しにしないで、今済ませてしまおうという事です。

前述にも述べてきた事、今出来る事から一つずつ。大切な事なら特に今やりました。

全ての人が少しずつの優しさを持って、そんな未来を想像して今日も楽しく。

そして、こんな考え方出来るような人間に育ててもらった両親・関わってきたすべての人へ

感謝を込めて、  
ありがとう。

オリンピックってなんだろう

燕石山人

ニュースやワイドショーの多くの時間がオリンピック開催についての報道だった。なんでこれほど大騒ぎするのか、私には不思議でなりません。

こんな事態なのに、オリンピックがどうのこうのと言っている場合ではないでしょう。パンデミック（世界的疫病大流行）が進行しているのに、安全な城にこもって、開催日がどうか、ああだこうだ論議しているのは大間違いではありませんか？

テレビを見ていて、おやおやおかしなことを言っているなと思ったのは、R・Kという元JOC委員の発言。オリンピックは、4年ごとの開催がオリンピック憲章にうたわれているので、延期は絶対あり得ないという。

（こんなものは、委員を集めて憲章を一行変えればいいだけのことだろう。延期や中止になれば、スポーツを食いものにして一部の連中が困るからにすぎない。）

あたかも、古代ギリシャの一地方都市・オリンピアから今日まで連綿として切れ目なく続いているかのような発言もしている。

オリンピックは、紀元前776年から西暦393年まで293回続いたとされる。夏に開かれる、音楽と詩もまじえた、ゼウス神に捧げられる祭祀であったということだ。テオドシウス帝の異教禁止令によって、廃止される。（広辞苑による）

「聖火リレーは神事だ」とまでいう。古代アテネで、トーチを持っていったどこからどこまでリレーをして走ったというのか？

アリストテレスかプラトンか誰かの書いた書物にでもそう謳ってあるのだろうか？後学の為に見せてもらいたいものだ。

総ては神話や伝承の世界の出来事に過ぎない。オリンピック開催に異を唱えることを排除しようという思考が透けて見える。

聖火リレーの形式は、あのナチスドイツの宣相・ゲッベルスが1936年のベルリンオリンピックの時に「発明」したものだ。こんなことも知らない人間が、オリンピック委員であったりする、という事自体が実は大きな問題なのです。

百歩譲って、金もうけには目をつぶるにしても、開催によって、ウイルス感染の危険性があり、それに伴う経済的損失は莫大なものになる。

繰り返しになるけれど、地球規模の未曾有の事態が発生しているというのに、開催にこだわるのはどう考えたって明らかにおかしいでしょう。

アスリート・ファーストとか言っているけれど、たかだかオリンピックだけの為に世界中の多くの人々を危険にさらしてもよいのか？

近年のオリンピックは商業主義にどっぷりつかっている。1964年のオリンピックの時は、アマチュアの祭典だった。プロスポーツの選手は参加できなかった。参加することに意義があり、榮譽は選手個人に与えられ、その国に与えられるものではないという崇高な理念が、クーベルタンによって提唱されたのではなかったのか？

世界的な人気の盛り上がり目をつけた、アメリカのCBSネットワークグループが、多額の金をIOCに払い放映権を買い上げた。

昨年夏に行われた中東ドーハでのマラソン・競歩などでも、酷暑の中で競技が強行された。

オリンピック誘致に関して、IOC委員や関係者に不透明な金の流れがあるとして問題になったのはつい先ごろのことではなかったか。

(その後どうなったのだろうか?)

アスリート・ファーストなどと言って、さもきれいごとを言っているが、つまるところは金儲けである。大きな金が動けばそこに多くの人間が群がり、汚い取引がなされる。

延期や中止になれば、巨額の経済的損失があるというが、開催したところで、捕らぬ狸の皮算用で、期待したとおりの経済効果が出るかどうかは極めて疑わしい。

オリンピック推進に汲々としている人たちは、自分たちに都合のいい指標でもって推計の数字を挙げているだけである。最近開催されたオリンピックで、はたして見込み通りの収益が上がったのだろうか?

経済効果も上がらず、運営には膨大な費用が掛かりすぎるので、次の次のオリンピックの開催地に立候補する国は確実に減っているという事実がある。

この機会にゆつくりと立ち止まって考えた方がいい。

聖火リレーの引継ぎセレモニーでは、強風で2度も聖火が吹き消され、肝心のスピーチ用の原稿が風でばたばたとあおられてしまって、読むことができない。

ドタバタ喜劇のようなこの光景を見て、ひとり大笑いしてしまった。

## 《風の吹き》

### 密林の歴史

### 打田昇二

アメリカ大陸でもメキシコやグアテマラ・ペリウズなどの中央アメリカ諸国は日本人に余り馴染みが無く、行くにしても日本からの直行便は無いから米国の都市経由で余計な時間が掛かることになるが、大西洋・カリブ海などに挟まれてユカタン半島と呼ばれる此の細長い大陸には、古代からマヤ、アステカなど独特の世界があったようで「メソアメリカ文明」として注目されている。

私は現役時代に公務で米国に行かせて貰ったが其の滞在場所がメキシコとの国境に在り西部劇にも良く出てくる都市の米軍施設だったので休日にはリオ・グランデ河の橋を渡り(検問所を通過し)メキシコに入ったけれどもフアーレスという地方都市を少し散策しただけなので、メキシコ領は道路の凹凸が酷いという印象しか無かった。

いつかは遺跡を見たいと思っていたところ再就職した勤務先の同系列旅行社からグアテマラとメキシコを回るツアーに誘われた。年末年始の休暇中に行けるので是に応じて成田からスーパージャンボ機でロスアンゼルスに向かったのだが、丁度其の頃は中東情勢に絡んで日米関係が微妙な時期であったから到着した空港で職員の嫌がらせに遭い機内待機と入国手続きで延べ二時間以上も待たされる国際的嫌がらせ?を受けた。

ロスアンゼルスに一泊して翌日はメキシコシティまで行くのだが今度はメキシコ航空に荷物を積み残しされた。年末で出稼ぎから帰国するメキシコ人の大荷物優先された為である。私たちの荷

物は行くのが何日も先の予定地に回されたから全く役に立たない。メキシコシティのスーパーで当座の下着などを買いグアテマラ行きの便に乗る。

九十分ほどで到着して大統領官邸などを見てからホテルに泊まり、翌日は早朝からフローレスというジャングル都市へ向かったのだが、今度は目的地上空の霧が酷くて降りられず、一旦、戻って霧の晴れ間を待つ。其の間に機体点検に来た整備員が閉まらなくなったエンジンカバーを蹴飛ばして閉めたのが気になったが無事に飛んで目的地へ。

其の後にフローレスからジャングルを貫く泥道をジープで六十キロ走ってティカルへ。此処はスペインの侵略に抵抗した勇敢なマヤ族の子孫が住む地域らしい。今はジャングルだが紀元前には大都市があった場所で、其の遺跡には「コンプレックス」と呼ばれる左右対称の神殿などが復元されておりマヤ文明の技術水準の高さが偲ばれる。

コロンブスの大陸発見以来スペインの覇権が中南米に広がる中で西暦一六九五年、ユカタン半島のスペイン総督ウルラスが密林に大道路を通す建設を始めた。此の時に大勢のスペイン人が来たが其の中にフランシスコ派の宣教師アベンダーニョが居て、建設中の道路から密林地帯に入り込み、

其処でマヤ族のタヤサルと言う部族に逢い此の人たちに改宗の説得をした。彼らは四か月間の猶予を求めたので、其の帰りに神父は密林で迷いウロウロしている時に大遺跡群を発見したと言う。

それがマヤ文明古典期最大の都市「ティカルの遺跡」である。此処には小さなピラミッドのような神殿が幾つか残されており其の建造技術力の高さは驚異的といわれる。中でも四号神殿は高さが七十メートルもあり、当時の米大陸で一番高い建



造物とされた。其の都市も十世紀頃に忽然と放棄され密林に覆われたらしく、其の理由は不明とされるが人類は何とも不思議で偉大な存在である。

## 茨城県の難読地名とその由来(1)

木村進

### 随分附【なむさんづけ】笠間市(旧友部町)

この随分附は茨城県の地名の中でも、なかなか読めない地名の代表です。

〔角川日本地名大辞典〕によると、地名の由来については、目下の者に自分の身分に随(したが)って、そのつとめを果たすように申し付けるという意味で、「なふさつ」が転訛したものの(新編常陸国誌)と説明にはあり、これが現在の正式な見解のようです。

新編常陸国誌というのは、江戸時代の初期に徳川光圀がまとめた『古今類聚常陸国誌』をもとにして、これを補うために江戸時代の後期の国学者「中山信名(なかやま・のぶな)」がまとめた歴史書です。これを中山信名の死後に、土浦の学者「色川三中(いろかわみなか)」などが追加や訂正などをして完成しています。

しかし、笠間市でもこの説明だけではよく理解できず、「アイヌ語説」「仏教語説」などもあるという言い方をしています。

「随分」とは「ずいぶん」と一般に読みますが、この本来の意味は「分(ぶん)に随(したが)う」という意味で、身分相応という意味でしたが、これが、「身分や自分の出来る範囲で十分に」などの

意味となって、現在の意味「はなはだ」「非常に」など限度を超えていることの表現に使われるようになったのです。

でもまだスッキリしません。それはこの身分に忠じてというけれど、「何故この場所にそんなことばが発生したのか？」ということがまったく説明に無いからです。

ただ「随分」が現在の意味になったのは鎌倉時代頃のもので、それ以前の奈良、室町時代の頃、またはその前から使われていた地名という事になりそうです。その頃にこの地にどのような身分の人が住んでいたかがわかれば、きっとこの意味も理解できるのかもしれませんが。

では少し視点を変えて、まわりの地形やその他の地名などに何かヒントは無いか「随分附」の場所を地図で確かめてみました。場所は常磐高速道と北関東道とが交差する「友部ジャンクション」の少し北側です。近くを涸沼川(ひぬまがわ)の支流である「枝折川」が流れており、この川沿いの低地で肥沃そうな場所一帯が「随分附」と呼ばれている地域です。この「枝折川」は一級河川で「しおりがわ」と読みます。昔、道の別れ道などに折った枝を置いて、帰るとき道のしるべなどにしていました。これが「枝折」で、本にはさむ「しおり(葉)」の語源といわれています。新潟の只見湖近くに「枝折峠(しおりとうげ)」があり、その他にも「枝折山(しおりやま)」などの名前も各地にあります。地図を見ていると近くに気になる地名が近くにたくさん散見されます。「長菟路(ながとろ)」「仁古田(にこた)」「土師(はじ)」「安居(あご)」「押辺(おしのべ)」などの地名です。こ

の「安居(あご)」には古代の官道の駅家(うまや)が置かれていました。また水戸から筑波山への参拝街道として「瀬戸井街道」が知られていますが、この道は現在の県道30号線(岩間街道)のルートとほぼ同じ所を通っており、この随分附にも宿場がありました。この随分附と岩間との間に「土師(はじ)」という地名があり、これが何か「随分附(なむさんづけ)」にかかわっているかもしれません。

「土師器(はじき)」ということばがあるように、これは昔の素焼きの土器で、この土器を焼く人たちのことを一般に「土師」と表記していたと考えられます。でも「土師」は元を辿れば、古代豪族の名前で、古墳時代(4世紀末〜6世紀始め頃)に古墳を築造し、またこの古墳に入れる装飾品をつくる身分の氏族に与えられた名前です。この土師器が作られていたのは、古墳時代から平安時代頃までだったようです。これは「随分(なふさ・なむさん)」が「身分に随って」というような意味に使われていた時代に合致します。

この近くの地名に「仁古田(にこた)」がありますが、この地名の参考になるのが、東京の西武池袋線に「江古田(えこた)駅」があり、すぐ近くの中野区側の「江古田(えこた)」という地名です。「えこた」という響きが古臭いので、駅名は「えこた」に変えたものと思いますが、この名前は、おそらく川の上流や中流で、あまり流れがなく湿地帯になっている場所についた名前だと思われます。かすみがうら市神立には「江後田(えごた)」という地名もあり、ここは霞ヶ浦に注ぐ「菱木川」の最上流の場所です。

## 【特別企画】

### 打田昇三の将門記 「罪と名声」 (四一-二)

○東国制覇の野望

「朱に交われれば赤くなる」と言う諺があるけれども、何時の時代でも周りにいる人物の影響は多かれ少なかれ受けるものである。善悪の判断は保留するとして、常陸国府を攻めて国司の代理を捕虜にした平将門も有頂天になっている時に「その三」で登場した武蔵国の権守・興世王から余計な知恵を吹き込まれたのである。将門の館へ戦勝祝いに訪れた興世王は、二人きりになった時に将門の耳許で次の様に囁(ささや)いた。

「此の度の勝利は素晴らしいのですが、是に對して中央政府は黙っていないでしょう。一国を支配しても、数か国を奪っても、必ず討伐に來るでしょうから、同じことならば坂東(関東)八か国を征服してみましよう。私も協力をします：」

「是を聞いた将門は頷いて、次のように答えた。『実は私も前から其の事を考えていた。なぜならば、その昔、斑足王子(はんそくおうじ)経文に登場する伝説上の人物)は皇帝の位に就こうとして(障害となる)千人の王の首を獲り、又、或る太子は父親の王位を奪おうとして嚴重な獄舎に父を投獄したという。此の将門は三世の末裔ながら皇室の血を引いている。此処で奮起挙兵し、坂東八か国から始めて都に攻め上り、朝廷を抑えて帝位に就くことを望むのも不自然では無い。』

取り敢えずは是から徐々に周辺諸国の国府を襲い国印と鍵を奪い、都から派遣された役人どもを

追い返すことにする。その様にすれば坂東八か国の兵を統率し、民を服従させることが出来る：」

「獲らぬ狸の皮算用」と言う諺があるが、興世王の軽率な扇動に乗せられた将門は、其れ迄とは本質の異なる軍事行動・武力行使を実行することになるのだが、其れは正義とか義侠心とか個人的な主張には関わりが無い野望になってしまふ。

其の方針に沿った：と言えは侵略行動を美化する表現になってしまふが、天慶二年(九三九)十二月十一日を期して、平将門は軍勢を下野国に向かわせた。騎馬武者はそれぞれ龍の様に堂々とした馬に乗り、数え切れない程の兵を従えている。是では十万の敵でも叶わないと思えた。一行は勢力を誇示するように進軍し馬蹄の音も高らかに、先ず下野国府の庁舎に立ち寄った。

栃木県庁は宇都宮であるが当時の下野国府は栃木市に置かれて居たと言う。将門の本拠地からは直線距離で五十キロ弱、徒歩の兵も未だ弱つてはいないから、如何にも凶暴そうな軍勢に押し掛けられた下野国府では肝を潰す程に驚いた。常陸国府が攻め落とされた事件の情報は伝わっていたけれども、まさか将門軍が他国に來るとは思ってもいない。何も出來ず軍勢に困まれてしまった。

折りから国府では新旧国司交代の時期であり、新任の藤原公雅(ふじわらのきんまさ)と前任者の大中臣全行(おおなかとみのまたゆき)が居合わせた。二人は将門軍に下野国を侵略されるような気配を感じて恐れ、土下座して神仏を拜むように将門に敬意を表してから、要求されないうちに下野国の印鑑と国庫の鍵を差し出したのである。

当然ながら将門は上機嫌で是を受け取った。国府には守備軍も居たと思うのだが、国司が最

初から降伏しているから部下も戦う義務は無い。将門軍の幹部たちが国府の管理職から挨拶を受けている間に、将門軍の兵士たちは暇であるから国府庁舎や其の近辺の建物に入り込んで物欲しうに歩き回った。下野国府の役人や付近の住民らは其れを黙って見ている他は無い。こうして下野国府庁舎をはじめ近辺の町筋は悉く将門の軍勢に抑えられてしまった。新旧国司は用済みとなり、監視役を付けて都に追いやられることになった。

監視役が居るから大声では言えないが追われる長官(新旧国司)は次の様に声を出して嘆いた。

「：天上界には五衰と言って五つの忌まわしい出来事があり、人間の世には八苦(生・老・病・死・愛別離苦など)が有ると言われるから今日、この様な苦しみに遭遇するのも仕方ないことではあるが：それにしても世の中が変わって天地に道義が無くなら善が廢れて、悪がはびこる：神仏の御利益も無くなるのは何と悲しい事か：(将門軍の襲来によって)下野国府に置かれていた大切な神事や行事に用いる器具も、卜占の用具も壞されたり持ち去られたりしてしまつた：」

国司や国府高官の家族たちも都に送り返されることになり、都から來る時は豪華な車で來たのだが立場上は捕虜であるから乗り物は許されず徒歩で行くほかは無い。季節は既に師走：霜が降り、雪が降つた冷たい道をトボトボと追われゆく姿を見た地元の人々は同情の涙を流し、目前に起きた不意の出来事に驚くばかりである、平将門は下野国府を完全に占領したのである。

○新皇僭称

「将門記」の中で一番に重要と言うか、平将門が「希代の悪人」とされた直接原因が此の章段に在ると思われる。単純に考えれば根拠不明確でも権力を握り権威を主張した者が勝者となる時代であるから、平将門が「俺も天皇になる」と宣言をしても差し支えは無い筈なのだが、冒頭に述べたように既得権を有する連中にはライバル出現は何よりも困る出来事なのである。

その様なことは一切、気にしない将門は更に進んで天慶二年（九三九）二月十五日に上野国（現在の群馬県）へ進攻した。上野国は常陸、上総両国と同じで国主は親王であるから都に居る。県庁には副知事に当たる上野介の藤原尚範が赴任して居た。余計なことだが「忠臣蔵」で知られた吉良義央は足利一族の末裔として上野介の官位を与えられていたのであり、威張っていても禄高は少なかつたから賄賂を収入源としていた。平安時代の  
上野介・藤原尚範は禄高も多く、威張っていたが敵の侵入に対しては全く無力であつたらしい。

其の身は捕虜となり、監視付きで二月十九日に都へ追放されてしまったのである。当然、国府は占領され四方の門は将門軍の兵士で固められた。下野国府では国司が最初から将門に降伏して鍵などを提出したのだが、上野国では攻め込んで来た将門の軍勢が奪い取つたのである。両国の被害者が都で報告する内容も微妙に違ってくる。

少し話が逸れるが、此の頃に南海に於いて反乱を起こした藤原純友は、追放された上野介・藤原尚範の甥であるから、将門事件の影響を受けたと言えないことも無い。そういう観点からすると、天皇制を笠にしていた当時の藤原政権にも不平不満や内部の反発が有つたことになる。

其れは兎も角、将門軍は上野国府庁舎内の四方の門を完全に閉じ、更に警備を厳重にし、昔から其処に居るような大きな態度で上野国を支配することになった。是は国家の大問題である。日本六十余州（国）の中で将門が侵攻したのは下総、常陸、下野、上野の四か国であるが天皇家の財政を賄う国の半分である。朝廷側で受けた被害意識は大きく政府よりも皇室が危機感を募らせる。

そう言うことにはお構い無く、将門の方は常陸国府攻略からの征服事業？が順調に行き過ぎたので既に日本全土（六十余国）を支配した様な錯覚を起こしていたらしく、主立った武将を集めて早くも其れまでの合戦に対する論功行賞を行うことにしたのである。

其の時に地元の神社に居たのか、或いは誰かに頼まれたアルバイトなのか不明だが、一人の巫女（みこ）さんが現れて来た。髪を振り乱し、白眼を剥いて神憑り（かみがかり）を上手に表現しながら「我は八幡大菩薩のお使いなるぞ！」と口走つた。追い払おうとした番兵も神様と言われると少し怯む。調子づいた巫女は毅然とした態度で将門の前に立ち、尤もらしく宣言した。

「朕が位（くらい）天皇位」を蔭子（おんし）名門の子孫（なまのこ）平将門に授け奉る。其の位記（いき）証（し）は、左大臣正二位菅原朝臣の靈魂（あまたま）（天神様）が示し奉る。私に其の伝達を託された八幡大菩薩は八万の軍勢を起こしてお護り下さる。汝、平将門は直ちに音楽隊を編成して雅楽の演奏でお迎えせよ！」急に言われてもラッパ手やドラマーなどは集められないから、ホラ吹きや嘘つき、地元のお調子者を集め、騒々しく神仏を迎えた。

原文には「…愛（こ）に将門、頂に捧げて（天

皇位が書かれた紙を）再拝す」とある。従う家来たちも義務か義理かで目出度い振りをしなければならぬ。立つて喜び、地に伏して感動した。其の様子は貧しい人が宝籤に当たつた様であり蓮の花のような笑顔を帯びていたのである。

冷静に考えれば、何処の者とも知れない怪しい姉ちゃんが出てきて「貴方を天皇にする！」と宣言しても真に受けたりはしないと思うのだが、其れまでの合戦、特に常陸国府侵攻では完全勝利を収めたから将門は慢心をしていた。更に「天神様こと菅原道真公」の名を出されると、藤原政権に不満の有る者は勇気が湧く。

菅原道真公は宇多天皇に信任されて右大臣にまで出世したが、独占欲の強い藤原一族は、其れが面白くない。時の左大臣・藤原時平らが讒言を持って道真公を失脚させ、九州へ抛り出した。将門の時代から四〇年ほど前の事である。

失意の中に配所で無くなつた道真公は雷神に化身して京都近辺に集中攻撃を掛け、氣象庁も京都市にだけ雷注意報を出し続けていた。第六十一代の朱雀天皇などは八歳で即位したが恐怖心が強く朝から晩まで母后に抱かれていたと伝えられる。

動物園のコアラでは無いので、其れでは天皇の職務を遂行できない。その様に天神様の御威光が知れ渡つていた時期であるから、平将門も其の気になつてしまったのであろう。誰が書いたのか、天皇に匹敵する「位」が書かれた用紙を捧げ持つた将門は是を何度も拝礼し、回りの部下たちも其れに従つて将門を伏し拝み、陣営全体が新興宗教の教団本部と化してしまつた。

上野国府を占領した将門は、日本国中を征服したような錯覚に陥つたのである。此の様子を見て

武蔵権守・興世王や藤原玄茂らも共に喜んだ：と言うより、自分たちの思惑通りに平将門が動いてくれたことに満足をした。其処で、何の根拠も無いが将門を「新皇Ⅱ新しく即位した天皇」と呼ぶことにしたのである。自分たちだけで呼び合うのであれば「天皇」でも「王様」でも良いが、其れを政府や朝廷に公言したのでは只では済まない。「新」でも「旧」でも「皇」を名乗れば無条件で反逆者にされてしまうのが日本の伝統である。

ただ、将門記の中で其の事を記載した部分は後代に何者かが付け加えたのでは無いか？とする説もあるらしいので、将門が皇位を狙っていたかどうかは断定できない。いずれにしても、本人が望んだ訳では無く自分に降りかかる火の粉を払い除けるようにして戦い、勢力を伸ばしてきた平将門が、事の成り行きから今や押しも押されぬ勢力となつて周囲から恐れられ、都の朝廷からは「危険な人物」と思われたのは事実であろう。

一応は民主主義と言われる現代でも、社会的に地位や身分が上がった者が、其の地位や位階勲等に拘るのは人間の悲しい性（さが）である。私は現役時代に組織のトップに拝謁する機会があり、その人が病後と聞いたので「〇〇長の代りは居ても個人の替わりは居ないのだから健康に気を付けてください」と放言して、怒られるかと思つたところ「有難う」と言われたことがあるけれども世の中、そう言う寛大な人物ばかりでは無い。武將として周囲に敵無しの状態になつた平将門が自分の出自を顧みて王者らしく振舞つた―その言動の一つ一つが冒頭に述べた「勝てば官軍」のうちには美談にされるが、合戦に敗れた後は悪意に満ちた表現に変わる。次の章からの将門記では平将

門が英雄となり、賊となる、是まで以上の正に波乱の生涯を展開することになるのである。

続く

## ふるさと風の文庫発売中!

- 「茨城の難読地名」(1200円)  
⇒<https://ishioka.buyshop.jp/items/15704954>
- 打田昇三の私本将門記「罪と名声」(1300円)  
⇒<https://ishioka.buyshop.jp/items/25101672>
- 兼平ちえこのふるさと散歩  
「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)  
⇒<https://ishioka.buyshop.jp/items/25101084>
- ヒロ爺のふるさと物語  
「霞ヶ浦の紅い鯨」(1200円)  
⇒<https://ishioka.buyshop.jp/items/24494455>

## ふるさと風販売 Shop

⇒ <https://ishioka.buyshop.jp/>

### 〈編集後記〉

現在世の中では、新型コロナウイルス騒動でもちきり、でもこれも今はまだ全世界的に蔓延の序章に過ぎないのかもしれない。終焉はまだ数ヶ月先、いや来年になるかもしれない。今まで数千年前からの人類の歴史を見ても、何度となく疫病との闘いが起こってきた。そしてその危機を、その都度乗り越えてきており、宗教史、民族史などを見ていくと、その跡を見る事ができる。しかし、近代は交通網が発達し、世界の人々の往来が簡単に行きやすくなると、これらの感染症の広がる

## ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

速度が極端に早くなっている。幸い医療の進歩も甚だしく、幾分は安心材料ではあるが、ここ数年より自己中心的な風潮が徐々に世界的に広まっております、この疫病の世界的な終焉に向けての結末が出来るかどうか人類が試されているのかもしれない。白井主査が生きておられたら何とおっしゃるか？ また動物検疫のプロでもあつた菅原氏にも聞いてみたかった。お一人が先に世を去られ、誠に残念だが、残されたメンバーでもう少し頑張つて行きたいと思つている。

(記責：木村)